こんなところに
仏教用語

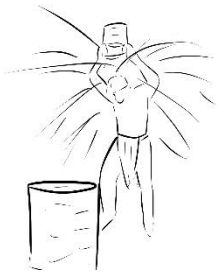
身近な仏教用語を紹介しています。

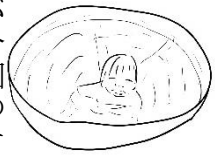
行水（ぎょうずい）

暑い夏、庭先で小さなプールできゃっきゃきゃっきゃと喜ぶ子供たち。夏の季語にもなっている「行水」が今回のテーマです。お経の中にも「行水」という言葉が出てきます。お釈迦様の言葉がそのまま残されていると言われる「長阿含経」の中には、「手に斟酌して食訖りて行水す」とあります。食事が終わった後、この当時は手で食事をしていましたから、手を洗う事を「行水」と言っていました。そこから、神仏に祈る時などに、身を水で洗い清めることを「行水」と言うようになりました。インドのガンジス川では、沐浴をする方がたくさんおられます。これも「行水」の派生でありましょう。

水で洗い清めることから、給湯器のない時代に、タライに湯水をためて体を洗う事を「行水」というようになりました。

夏に湯につからず、さっと風呂から出たり、シャワーだけですますことを「カラスの行水」ともいいます。でも、夏も湯につかった方が、疲れがとれるそうですよ。



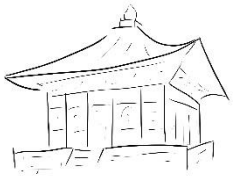


娘のキュウリは実り、私のメロンは風で折れた。蒼瓢

経蔵（きょうぞう）

身近な仏教用語ではありませんが、大きな寺院に行くと時折「経蔵」という建物がありますので、この度「経蔵」を取り上げます。

「経蔵」には二つの意味があります。一つは、仏教の文献を分類すると経・律・論の三種となります。経とはブッダの教え、律とは戒律、論とは解釈のことです。これらの総称を三蔵といい、三蔵を究めた方を三蔵法師と呼びました。この三蔵の中の経を「経蔵」といいます。ブッダの教えをまとめたものです。

二つ目の「経蔵」の意味は、漢字の通り「経」の収められている「蔵」の事です。大きなお寺さんで「経蔵」という建物があれば、是非注目してください。情報が簡単には手に入らない時代、お経を調べるときには、「経蔵」に調べにくるということもありました。親鸞聖人がまさにそうです。茨城県笠間にある稲田の草庵を拠点として、お経を調べるために鹿島神宮に通われました。当時は神宮寺といい、「経蔵」があったからです。五二歳の時に、「顕浄土真実教行証文類」の草稿本ができます。

この年を浄土真宗立教開宗の年とし、今年が八〇〇年という記念の年であり、京都では大きな法要が勤められました。